

○高橋ユリア* 下村道子* 大森佐与子* 山岡昌之**

(*大妻女大 **九段坂病院)

目的 我々にとって食事は「日常の無意識的で通常的な行動」であり、特に重要な意義を感じながら食事をするという事はあまりないように思う。しかし、拒食症者にとっての食事には恐怖に近いものがあり、過食症者にとっての食事は、最も重要なくつろぎの時間になっているのではないかと考えられる。そこでこのような摂食障害者にとって、食事や調理をする事が持っている意義について検討を行なった。

方法 心療内科に通院および入院している、摂食障害者26名にインタビューによる調査を行なった。この26名に対して、我々は摂食障害者の毛髪中含有微量元素を調べる為に、毛髪を採取している。この採取時における会話を通して面識を持ち、その後、自然な会話の中でのインタビューになる事に留意した。

結果 半数以上の方が自分は食べないが、料理を作り人に食べさせる事は好きだと答えた。この現象は拒食期に多く、家族等に摂食を強制する場合が多かった。家族の摂取するエネルギーより自分は少ないエネルギー摂取であるという、周囲との比較により、体重増加をしないという認識と安心感を得ていた。満腹感や空腹感を食事の尺度にできなくなっている人が多く、すべて他との比較により肥満への恐怖を押さえていた。過食期の人は摂食欲求を満たす手段として味見を目的に料理を作るが、すべて吐きだしていた。食べる事と生きる事の根本的な結びつきなど、日頃意識せずに食事をしている我々に比べ、摂食障害者にとっての食事とは、普通では考えられない程の食べる事へのこだわりや、意味づけを持たせた特異的なものであり、自分を表現する情報伝達的手段として儀式化していた。